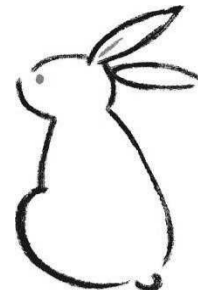




# Shiro-usagi

白兎・素兎



平川塾HP



アメブロ

文責：平川 達三

## 「書きことば」「大人ことば」

国語読解の記述の答えを点検していると、「～じゃない」ということばを使っている子が結構います。その他にも「～だけど」「食べれる」「見れる」などを無意識に書きます。正しくは、「～だけれど」「食べられる」「見られる」。ちなみに、「来られる」ですが、可能の表現なのか尊敬の表現なのか区別が出来ないので、「来ることができる」が正しい表現です。

Lineが普及しはじめたころ、Lineに打ち込んでいる台詞を「文」「文章」だと思っている子が結構いましたが、さすがに、これだけ普及し、色々な問題が噴出すると、小学4年生のお子さんであっても、Lineで送っているのは「文」や「文章」ではなくて「声を文字に置き換えてしゃべっているだけ」という認識を持つまでになっていますね。これは大変良い傾向です。

ところで、「文」と「文章」の違いはご存じでしょうか。

「文」は書き始めて句点（「。」）で終わるまで、その集合体が「文章」です。

中学2年生や3年生の生徒さんで国語が全然伸びないと訴えて私の塾の扉を開けて下さる新規の方を拝見します。に、小学生の低学年から中学年期にうつる、いわゆる小学3年生から4年生の期間がいかにか大事なのかを痛感させられることが多いですね。

例えば、こんな感じです。

### 【漢字ギャップ】

これは小学4年生の時期に学ぶ漢字で起こります。中学生になって漢字が読めなくなる、漢字が覚えられなくなってくる子のほとんどが、4年生辺りからあやふやになっています。

### 【ことばの決まりギャップ】

いわゆる文法ギャップです。主語・述語がどれか分からないというものです。

「～が」「～は」に当たる部分が主語という風に教えられている生徒さんが多いのですが、そういう教え方をされているので、例えば、「私は犬が好きです。」の主語は「犬が」だと答えた

り、「僕も走ります。」には主語がないと判断したりします。

ちょっと寄り道をしますが、高校生に尋ねてもまともに答えられない質問があるので紹介しますと、

「名詞とはどんな言葉ですか？」

というのがあります。

ちゃんと勉強をしていない高校生君は問題外として、ある程度の勉強をちゃんとしている生徒さんであれば、「主語になることが出来ることば」と答えますが、間違いです。

名詞はそれ自体では文の中で何の働きもできない言葉で、単なるものの名前であったり人名・地名・作品名などの固有名詞であったり、「こと」「もの」などの形式名詞であったり、「私」・「あなた」・「これ」などの代名詞であったりします。

ここに外国語には決して存在しない品詞である助詞が置かれることで、初めて文の中での役割を得るのです。

例えば、「私」であれば、「が」という格助詞や「は」という副助詞がおかれて「私は」「私が」という主語としての役割を担い、「私を」「私に」というように「を」や「に」という格助

詞を接続させることで「目的語」という役割を得て、文の中で活躍するのです。この性質を持つ言葉が名詞です。

お話を戻します。

特に【ことばギャップ】が露わになるのは、中学2年生の数学での証明問題とか、確率の問題にさしかかったときです。

証明文が書けない生徒さんが出て来ます。中学校の数学における証明文なんて、特に基本的なものはテンプレートに近い決まった形式があるのです。なのに書けないのです。これは数学的部分ではなくて国語的部分に問題があるのです。

さらに、確率の場合はこういう表現でつまづきます。

「くじ引きで、少なくともAさんまたはB君のどちらかが当たる確率」

という表現について、「自称」ではなくて「本当」の進学校の高校3年生になっても教科書のこの表現が理解出来ない生徒さんが半数も存在したということを知ったことがあるので、驚いたというよりも、呆れてしまいました。

それで、どこに引っかかっているのかというと、「少なくとも」という部分です。

- ① Aさんが当たる
- ② B君が当たる
- ③ AさんもB君も両方が当たる

だから、両方とも当たらない方を見た方が容易に解ける。

この連鎖反応が出来ないので。

このような思考レベルの中学2年生や3年生のお子さんを観ていると、大抵の場合、「話しことば」と「書きことば」の区別が出来ていません。そこで、今現れている（国語が伸びないだけでなく全科目にわたって伸び悩んでいる）現象だけに目を向けるのではなく、その奥に潜むいわゆる「根っこ」を調べていくと、大抵が【漢字ギャップ】・【ことばの決まりギャップ】にたどり着きます。

小学4年生辺りからの漢字があやふやで、小学3年生辺りからのことばの決まりがあやふやなのです。特に3年生辺りのことばの決まりをあやふやなま

まで置き去りにしてきた子は、「大人ことば」が理解しづらくなります。

それで、どこで「子どもことば」から「大人ことば」に変わるのかというと、算数の教科書と数学の教科書を見比べてもらえば一目瞭然です。

実は、ここから「ギャップ」が始まるのです。教科書に書かれている意味がだんだん理解できなくなってくる。これが「中1ギャップ」です。このギャップを小さくするかまるで感じないくらいにさせるには、小学生の間に「しゃべりことば＝普段のおしゃべりをするとき」で、「話しことば＝教室でみんなの前で発表するとき（フォーマルなシチュエーション）」であり、「書きことば＝相手に分かりやすい文の書き方や文章の進め方を意識したことば使い＝大人ことば」というように、これらの区別をはっきりと出来て、ある程度の使い分けが出来るように国語を学習しておくことがとても大事だと考えます。

## 眠くなる本・読み続けられる本

乱読・積ん読・浮気読みにかじり読み。

この、どうにもこうにも褒められたものではない不躰な本読みスタイルにも、あくまでもワタシ個人の中でのことですが、ちょっとした決まりめいたものがあることに最近気づきました。

大別すると2つになります。

ひとつ目は、読み始めるとすぐに眠くなる本。ふたつめは、読み続けられる本。「読み続ける」というのは、眠気に襲われずに読んでいられること、乱読もしないし浮気読みもしないで、ずっとその本を読みきるまで持ち歩き、珍しくも何度も読み返す本のことで

まずは、読み始めるとすぐに眠くなる本について申しますが、一生懸命に書かれた書籍に対して読み始めてすぐに眠くなるのは失礼極まりなくて何事かと、当然のことながら叱られるでしょ

うから、著作の実名を挙げるわけには参りませんが、大抵の場合は、次の部類に入ります、

- ① データを盾に論じられている本。
- ② これまでの研究結果がいかにか正しいかが主張されている本。

「書籍に数式を入れると売り上げ数が一桁減るから入れないようにしなさい」と、執筆する直前になって出版社から忠告を受けたと、その書籍の「はじめに」の部分で、ちょっとジョークを交えて書いたのは、スティーブン・ホーキング博士でした。

この行（くだり）を目にしたのは、もう30年ほど前のことです。当時は「そんなもんなんやね？」という感じでした。（当時の私もまだ）若かったので、数式のひとつやふたつが書かれていても、その数式の意味なんて、てんで分からないくせに、鼻息だけは荒く、ご

り押しでも乗り切ってやるというエネルギーがあったので、勢いだけで読んでいました。文字通りの勢いだけなので、「なんで？」という引っかかりもなければ、それが無いものだから立ち止まることもなく、ただ「先へ」進めているだけでした。

それから30年を経て、曲がりなりにも年齢だけは重ねてきていることもあり、「先へ」ではなくて「奥へ」入り込みたくなってきたのです。そうになると、理系アタマではないワタシにとっては著者の主張の裏付けとなっているらしいデータとか数式というものが助けにはならず足かせのようになるのです。

ド文系のアタマってこうも数字や数式に弱いのかと、自分の理系的頭脳の脆弱さに恨み辛みを抱きかけるのですけれど、一種の障壁のように感じていることは確かなので、はて、どうしようかと悩んでいるうちにいつの間にか寝てしまっていて、手から床に落ちた書籍がたてた大きな音で驚いて目を覚ますということがしょっちゅう起こるわけです。

この原因は、著者の文章構造にあるわ

けではなくて、こちらの読み方にあるのです。

読解や作文にスキルがあることは今更になって申すことではないのですけれど、ただ単に楽しみとして、あるいは知識を増やす目的とか、自分がしてきたことの正否とか、そういうことが知りたいときと、例えば、私が好きな向田邦子さんの著書や幸田文さんや青木玉さんの著書、あるいは司馬遼太郎さんや井上靖さんの著書などを読むときは異なった読み方がある、どうもそのスキルが不足しているというのを、高校生の現代文の読解指導をしていて気づかされたのです。

小中学校までの読解問題というのは、例えば、「それは何を指しますか」とか、「そういうこと」とはどういうことか、20字以内で書き抜きなさいといったように、細かいのですね。ですから、読解問題用の題材文にまるで張りつきでもするように読んでいかなくても正解を導き出せないことが多いのです。

ところが、高校生への読解指導となると、特に論説文や説明文については、

紙面に張りつくようにして読むのではなくて、やや高いところから全体を見るような意識（俯瞰的意識）で、この題材文章の幹になっている所はどこか、あるいは、枝葉に当たるところはどこかを、どれだけ素速くつかむことが出来るかというスキルになるのです。

これを、自分が読み始めてすぐに眠くなる本に適用しますと、なるほど、通用するかもしれない、となります。確かに、長年の研究や研鑽を積まれた著者が根拠となるデータを元に私たち読者に懸命に伝えようとして下さっているのですけれど、データはあくまでも論じられている文章の根拠、大木でいうと、いわゆる目に見えない土の中の根っこ部分とか、幹を飾る枝葉（えだは）であるから、1回目を読むときはそれらを飛ばし読みしてから、それを根拠として出された核となる部分や結論部分だけを読み、大まかな幹の部分のイメージが己の脳裏に浮かんできたら、今度は根拠となる部分に視線を移す、というような読み方をすれば、眠気からちょっとは解放されそうな気がします。ただし、これはまだ理想論

と申しますか、実践する前のイメージの段階にすぎません。でも、これを試してみたい書籍はあるのです。それは、自分のウォーキングの方法がちゃんと理にかなったものなのかどうかとか、科学的に正しいものなのか否かとか、そういうことが知りたくなったので手に入れた書籍でなのですが、ワタシごときの頭脳ではあまりにも情報量が多かったり、すぐさま「障壁」が現れたり、読み始めていきなり眠くなったのです。そういうこともあって、このスキルはぜひ身に着けたいところです。

そうすれば、小説や随筆やエッセイなどを読むときの、筆者の素晴らしい表現などについて感心したり参考にしたという楽しみを味わいながらの「じっくり読み」とは異なる方法で、読書の幅が広がるわけですから。

この方法をもっと若いときに気づいていれば、ちょっとは人生が変わっていたのかもしれないけれど、こういう気づきとの出会いは絶妙のタイミングで起きることが多いので、気づけたことへの幸せをかみしめることにします。

## うるさい本・静かな本

前回の記事の派生のようなことなのですが、ワタシに読書をさせて5分以内に眠らせるのは実に簡単です。

- ① うるさい本。
- ② 同じような内容を専門用語を並び立てられ、持論的な理屈がくどくどと書かれている本。
- ③ 数式とかグラフなどがやたらと表示される本。
- ④ 「エビデンス」をはじめ、必要悪なほど横文字がカタカナ表記されている本。

①の「うるさい本」というのは、おそらく急仕立てで作られたらと推測される書籍です。概して一般書に多い気がします。今話題のことを、執筆者はとにかく方々から資料を掻き集めさせられ、十分な検証期間も許可されずに、出版社から責め立てあげられた末に書かされたのか、文章の検証もなされていないという印象を受けますし、ときには執筆者の悲鳴さえ聞こえてきそうな感じを受けます。

こういう書籍の特徴は、「いかに自分の主張が正しいか」とか、「読み手のあなたは知らないだろうから、この私

が教えてさしあげましょう。」といった印象を受けることが多く、「別にあなたの解説を聞く気もないから、ちょっと静かにして欲しいんやけど。」という心理が働くこともあるのか、どうしても、押しつけがましい説明文章の割に説明が行き届いていないというように、いわゆる粗（あら）だけが目について、ただ単に、とにかく、うるさいだけ。私はこういう書籍を「かまってちゃん書籍」と言っています。

その場限りの言い放ち、その場限りの売りっぱなし。

巧妙な宣伝につられてネットで思わず買って手にした瞬間に、お金を捨てたような気にさせられます。しかしながら、曲がりなりにも書籍なので、ゴミ箱行きは気が引けますし、古書店に売ってもスズメの涙ほどもない金額にしかならないしで、こういうのを「箸にも棒にもかからない」というのでしょね。

なので、「積ん読」候補にせずに、即座に「本棚のこやし」にして、数年後、その他大勢、十把一絡げで古書店へと追い出します。

②は心理学の書籍に多い気がします。「～的」という表現の連続で、難解な

専門用語で読者を振りまわし、専門家以外の、いわゆる門外漢は入って来るなという悪意さえ感じられます。

③も①によく似ていますが、こちらは前回の記事の通り、研究と研鑽を重ねたデータを元に真摯（しんし）に書かれているものであれば、前回の通り、こちらの読書スキルをアップさせてくれる存在としての救いがあります。

④は、いかに自分に知識があるかを自慢されているような気しかしません。こういう「かまってちゃん書籍」は迷惑のナニモノでもないのです。

と、エラソーに吐（ぬ）かしましたが、当のワタシはというと、作家でもなく、文筆家でもなく、ヒーロン家先生でもありません。ずぶの素人です。だからこそ、こういった類（たぐ）いの書籍に対する免疫力がないから、ワタシの場合はアタマが即座に拒否反応を示し、最大の防御として眠らせるのです。

書籍の中味は、やっぱり静かな方がイイ。なにも特別な言葉ではなくて、さりげない日常の言葉が、推敲と洗練で以て、ふさわしい場所で生き生きとしている様は、その言葉が、人の手によるのではなくて、その言葉の自らの意志でそこに存在するように思え、その崇高な姿を目の当たりにすることで、思わず引き込まれるのです。

すると、ワタシのアタマの中がだんだん広がってきて、閉じられた窓が開き爽やかな風が通り抜け始めます。

こういうことに幸せを感じる読書もあってイイのではないかと、あくまでも個人的なのですけれど、思っているワタシがいます。

## 塾長の小ネタ話

マグカップの取っ手がついているのは、どっち側？

私が時々子どもさんに仕掛けるのが、「突然ですが」クイズ。

「突然ですが、マグカップの取っ手はどっち側についていますか？」

大抵の子は、右手と左手を出してどっちで持ってたかなと頭の中でマグカップを回します。日頃何気なく持っていることもあってか、いざとなると意外と即答できないもです。

「右（左）で持つ。」

「人の話、よ～聞きなはれや。アンタがどっちで持つかなんて聞いてへんで。『マグカップの取っ手はどっち側についてる？』と聞いたんやで。」

正解は「外側」です。



## 「妙」という新しい歴史

もし自分が小学生のときにこれが出来ていたら、今頃どんな人生を送っているのだろうか。「人生」なんていう大げさなことでなくて、どんなことを生業（なりわい）にしているのだろうかと思うことがあります。

小学生のときからなかなか理解が出来ないでいて、結局、高校2年生まで当時の私に影を落とし続けたもの。それは算数と数学。

数年前に高校受験への国語読解指導のアプローチの仕方を確立させたので、昨年辺りから大学受験のための現代文と古典（古文・漢文）のアプローチ研究と、ずっと以前に構築していた中学受験の算数と国語の再構築を始めました。

33年前に塾屋稼業を始めたとき、最も苦心させられたのは算数と数学なのですが、それでも、その苦心させられることがおもしろいと感じ、数学的論理の入門でもある中学1年生の数学から当時の生徒さんと一緒に歩いていこうときえ思えるようになっていました。

塾開設当時の私は28歳でした。それから33年、よくぞ続けて来られたものだと、感謝の極みなのです。

小学4年生の範囲から中学受験のためのアプローチを再構築をしながら、自ら問題を解き進めているのですけれど、関われば関わるほど、数の妙とか図形の妙とか、「妙」という世界のおもしろさを実感するのですね。

再構築って大変なはずなのですが、まず自分が楽しんでいるので、間違えても何とも思わないのですね。それどころか、自分の思考の至らなさに気づかれ、自分の思考の斜め上に行くような発想で作られた問題を前にして、いつの日か斜め上の発想が出来る頭脳を持ちたいと思っている自分がいます。

こういう「妙」のおもしろさを体感するにつけ、ふと考えることがあるのです。このおもしろさを、自分ももっと幼いときに手ほどきしてくれる大人がいたら、自分はどうなっていたのだろうか？

音楽が好きで好きでたまらなくて小学6年生で音楽の世界に飛び込もうとしたとき、たまたま手ほどきをして下さり、音楽大学への道を指南して下さいる存在があったのです。

算数とか数学が理解出来ないと喘（あえ）いでいる自分の前に、音楽の手ほどきではなくて数学の手ほどきしてくれる存在があったら、自分は理系の世界に飛び込んでいたのだろうか？

この話をすると、ある友人が、こんなことを言ってくれたのです。

ボクは数学のハードルを越えました。数学と同じくらい音楽が好きだったけれど、自分にはこのハードルは越えられないと思い、数学の方を選んだのです。でもあなたは、ボクが数学のハードルを越えて行ったように、音楽のハードルを軽々と越えて行けたから、今のあなたがあるのです。

この友人の言葉を借りるなら、では当時の私にも数学のハードルを友人のように軽々と越えていける力量を持ち合わせていたとしたら、どうなっていたのだろうか？

人それぞれにそれぞれの歩みがあり、その歩みはその人の歴史になっている。「歴史には『もしも』がない」と言われるけれど、それでも「もしも」を起こすことが出来れば、それはそれで、これから塾屋としてどんな道が開けるのだろうか、なんてことを考えると、結構おもしろいのです。

友人が言ってくれたように、軽々と音楽のハードルを越えられたわけではなくて、紆余曲折をしながらどうにか越えて来られたのだけれど、ピアノ弾きの世界からはもう遠ざかっているから、音楽の方の自分の歴史は本当にゆっくりとしか進まないのです。

それでも、もうひとつの歴史、いわゆる「数の妙・図形の妙」だけでなく、「妙」という世界は音にも言葉にもあって、その「妙」を楽しみながら、気づいたり見つけ出したりするという新しい歴史をこれから積み上げていけば、自分の歴史の中に「もしも」を少しでも起こせるかも知れない…、なんていうことをことを考えています。

## 読解問題に接する楽しさ

高校生の読解指導を控えて解いていたのですが、昨日の記事の「妙」とつながる行（くだり）と出会いました。

「詩・ことば・人間」（大岡信著）のほんの一節に過ぎないのですが、見事に代弁して下さいました。

「われわれが使っている言葉は氷山の一角ということである。氷山の海面下に沈んでいる部分はなにか。それは、その言葉を発した人の心にほかならず、またその心が、同じく言葉の海面下の部分で伝わり合う他人の心にほかならない。」

大岡氏は、私たちが日常で使っている言葉こそが心の深部をほんのちょっぴりのぞかせる窓のようなものであって、私たちはそれをのぞきこみながら、相手の奥まで理解しようとたえず努めているのだと書かれています。

言葉を発する人と、それを受けるとで交わされる心のやり取りにこそ、ことばの妙があるのではないかという、未熟なワタシが考えたことながら、あながち間違っていないのではないかと思えた瞬間に巡り会えたような気がします。

世の中には本当にたくさんの書籍が存在します。それを全部手にとって読むには、「積ん読・乱読・浮気読み」に

「かじり読み」を付け加えたようなこのワタシでは到底無理でしょうし、たとえこの不躰さがなくとも、全部を読むには一生が短かすぎます。

こういうことへの気づきが、つい最近になって小中学生の国語読解の指導にも役立てることが出来るようになってきました。本当に、漸くです。

それと同時に、読解指導が新たなステージへとアップする予感もしきりにします。

読解問題に接する楽しさは、それぞれの題材文に接することで、筆者の心の片鱗に触れることと、この一部分だけでなく、書物全体を目にしてみたいという欲求が生まれ出て、あらたな著者とその著作に巡り会えることでしょうか。



## 狭い窓口なのだけれど…

思いつくままに文章を書くというのは楽しいことなのですが、心がそぞろになっていくというちょっとしたリスクがあるように思います。というのは、本日の国語読解ZOOM指導の準備として読解問題に接しているときに、頭の中に静けさが戻ってくるのを感じたからです。

読解問題の題材文というのは、様々な作家さんや学者先生、評論家などが書かれた文章のごく一部分が切り取られたものです。そして、その執筆者とは縁もゆかりもない人が設問者となり、この題材文に接する学ぶ立場の人々を設問者が目指す方へ導くための設計図を立ち上げ、それに則（のっと）って設問を読解者に投げかけてゆくのです。

生徒さんは題材文を読み設問者の意図することを推理しながら正解を導き出すことで、執筆者によって書かれた文章に対して論理的に執筆者の意図を捉えるという、いわゆる深読みの訓練を積み上げていきます。

一方の指導者であるワタシですが、世に数多ある書籍を網羅できるはずもないわけです。でも、問題集を1冊だけでも手にして机上に広げれば、それはもう、自分の知らない優れた文章の宝庫としてだけでなく、ありとあらゆる書籍へといざなってくれる窓口に見えるのです。このように考えますので、

ただ読解問題を解いて生徒さんに指導するだけで終え、「はい、では次に行きましょうね。」では、もったいなさ過ぎるような気がしてなりません。

一応指導者という冠を持っているわけですから、この文章をどのように味わえば良いとか、引いては執筆者のバックボーンとか、そういったところまで捉えておくのは、仕事だからという一面だけでなく、個人的な楽しみとして大事にしたいと思うのです。

そのような感覚で読んでいきますと、この題材文は、執筆者が1冊の書籍として築き上げた膨大な情報のほんの一部でしかないのですから、窓口としてもあまりにも狭いのです。

狭いからもっと奥が見たくてもなかなか叶わぬことでしょう。この「もっと奥を見たい」というのもまた知的好奇心のひとつです。

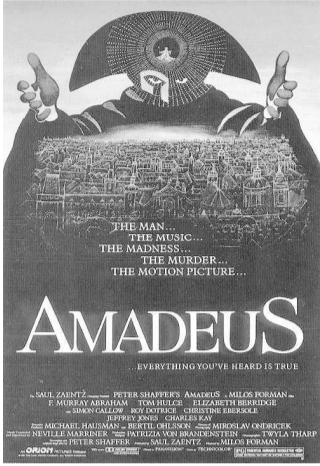
目の前の生徒さんにもこのような好奇心をくすぐられる楽しみを感じていただいて、執筆者の作品の世界への招待状を受け取ってもらえれば、きっと素敵な授業になるでしょうね。

そういう招待状を手渡すことが出来るようにするために、ちょっと狭いけれど、この素敵な窓口とういう名の空間を心静かに楽しむのもまた一興ですね。

# 本当は怖い？ モーツァルトのお話

もう随分前のことですが、モーツァルトの最期についての謎をめぐる洋画がヒットしました。

『アマデウス (Amadeus)』。



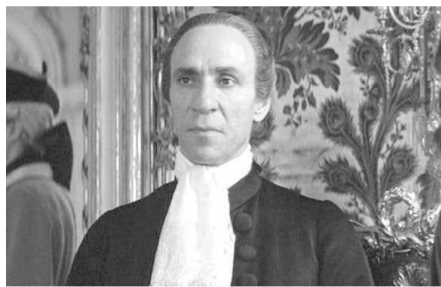
もともとはブロードウェイの舞台『アマデウス』だったのもですが、1984年に映画化されました。

その映画版『アマデウス』は、アカデミー賞の作品賞、監督賞、主演男優賞、脚色賞、美術賞、衣裳デザイン賞、メイクアップ賞、音響賞の8部門を受賞したほかに、英国アカデミー賞4部門、ゴールデングローブ賞4部門、ロサン

ゼルス映画批評家協会賞4部門、日本アカデミー賞外国作品賞などを受賞しています。

さらに、2019年には、「文化的、歴史的、美術に重要」としてアメリカ国立フィルム登録簿に登録されました。

内容は、当時のオーストリア帝国の宮廷楽長を務めていた、F・マーリー・エイブラハム演じるアントニオ・サリエリが、モーツァルトの天才性に対する激しい妬みを抱き続け、モーツァルトの死後に自分がモーツァルトを殺したという罪にさいなまれて自殺を図るところから始まります。



F・マーリー・エイブラハム扮する  
アントニオ・サリエリ

その後、精神病院に強制入院させられた（当時は自殺をはかると、精神異常と見なされ、助かっても、即刻、精神病院に強制入院させられたそうです）サリエリの神父への告白を中心として、トム・ハルス演じるヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの物語が進められていきます。



トム・ハルス扮する  
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

ところで、モーツァルトの作品と言われたら、あなたはどんな曲を思い浮かべますか？

『トルコ行進曲』・『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』・『レクイエム』・『フィガロの結婚』・『ドン・ジョヴァンニ』・『魔笛』でしょうか。

とりわけ、『アイネ・クライネ・ナハトムジーク（4つの夜想曲）』は、名

前こそ知らないけれど、その曲の最初の部分を耳にした瞬間に、

「あ、知ってる！ これがその曲なんですね！」

という台詞を、あなたから確実に聞くことが出来る作品です。

モーツァルトの音楽の特徴として「脳裏に残らない」というのがありますが、それは、誰でも口ずさめるほど親しみやすいけれど、この親しみやすさがわざわざ脳裏に残りにくいからなのだそうです。

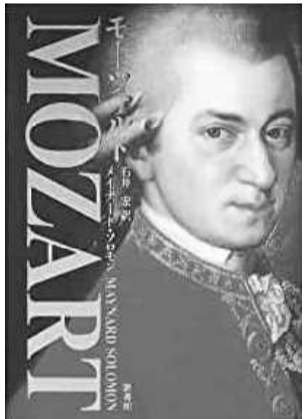
クラシック音楽の芸術家の中で、日本で特に人気が高いのは、ベートーヴェン・ショパン・チャイコフスキーですが、これは世界的に見ても同様らしくて、彼らに対する研究書などはかなりな数で出版されていますし、それだけ邦訳本も多いのですが、モーツァルトに関する研究書の数は群を抜いています。その中でも最も優れているものにメイナード・ソロモンの著書が挙げられます。

モーツァルトの最大の悲劇は、自堕落な生活が招いた顛末ではなくて、モーツァルトの天才性に気づけず、あくまでも自分が望む生涯を歩ませようとした父レオポルトとの確執にありました。

ヴォルフガング坊やの名声は、彼が3歳のときには、ヨーロッパ中の王室に聞こえていたそうで、その仕掛け人こそが父レオポルトでした。

ヴォルフガングが幼い頃から、自分の計画を着々と進行させるべく、あまり頑健でなかった幼い息子と姉のマリア・アンナ・モーツァルト（相性は「ナンネル」とを引連れてヨーロッパ中を延々と馬車で旅させて売り込み続けたことが功を奏していたからです。このおかげでモーツァルトは8か国語を読み書きできたそうです。

当時の移動手段は馬車しかありませんし、それも現代のような舗装道路ではなくて、雨の日にはぬかるんでしまう悪路の連続でした。移動は大抵夜中に行われます。というのは昼間に移動すると森林の多い平原が広がるヨーロッパでは、追いはぎが現れて下手をすると命まで取られたというほどに物騒だったからです。



メイナード・ソロモン著『MOZART』

それはともかく、モーツァルトに関するどの書物を読んでも、才能と人格の一致していない代表選手であることには変わりがないようで、酷いものになると、人格破綻者のように書かれていますし、それは映画『アマデウス』でも余すところなく表現されていました。本当のところは随分と違うようです。

メイナード・ソロモンの著書は、その点から見ても、モーツァルトの心理学的分析もしながら真摯（しんし）に向かい合い粛々と進められていく内容となっていて、特筆すべきものがあります。

さて、映画『アマデウス』では、モーツァルトの敵役（かたきやく）みたいな設定にされていたアントニオ・サリエリですが、モーツァルトが当時のオーストリア帝国のお抱え音楽家になったのは20歳そこそこで、いかな天才の

名をヨーロッパ中にとどろかせていたとはいえ、宮廷内では駆け出しの最下位で、それに対してサリエリは宮廷楽長を務める、いわゆる最高位にいた人でしたから、権力的な構図から見れば、まるで勝負にならなかったのです。

相関関係から見ても、いかに天才の名をほしいままにしている「ヴォルフガング坊や」とはいえ、最高位の楽長さんが、彼の才能を妬むというのはあり得ないのではないかというのが、研究者のおおよその見解です。

もうちょっと下世話に表現するとすれば、

「人格がやや破綻しているらしい若造が、足もとをチョロチョロして、なんかいきがとるなあ。」

その程度だったようにどの本にも書かれているので、間違いなことなのでしょう。

それで、この人格破綻というところもどれほどのものだったのかといえば、社会的な生活に関しては支障はなかったようです。ただ、成人した彼が首都ウィーンで生活していた当時は超売れっ子で、推定ですが、現在に換算して年収1億円はくだらなかったそうです。ところが、晩年は部屋を暖めるための

薪（まき）を買うお金もなかったそうで、その原因は友人から借金をしまくっていたことによるものだというのは、どの研究書でも明らかにされています。

年収1億円の人が、友人から借金をしまくって、それが原因で薪を買うお金も手元になかったなんて、どれだけ散財していたのかということなのですが、実生活にかなりな問題があったのは確かです。

モーツァルトの生涯は本当に短くて36年に満たないのですが、死因は長年の肝臓障害による肝硬変と腎不全だというのがおおかたの見解で、どの書物を読んでも、自堕落な生活だったことが書かれています。

毎晩宵っ張りて酒を浴びて仲間と遊び、帰宅は毎回午前様。そこから昼下がりで寝て、気まぐれな時間に起きて依頼を受けた作曲という仕事をしはじめ、日が沈むと出かけていき、夜通し酒を浴びて仲間と騒ぎまくるのです。おまけに帰宅しても酒が手放せなくなり、いわゆるアルコール中毒症になり、酒臭い息を吐きながら仕事をしていた姿が想像されます。

この自堕落な生活は何に起因するのでしょうか。

それを避けるためとはいえ、幼子2人が悪路を進む馬車に容赦なく揺られるわけですから、次の町に着く朝方には疲労困憊（こんぱい）の状態です。

特に病気がちだったといわれている幼いヴォルフガングは、宿に着いた途端に高熱でうなされたのですが、それも完全に癒えない状態で、父親はあらかじめ打診をしておいた数々の王家にナンネルと一緒に連れ回しては、わが息子の天才性を売り込んだのです。

当時は現代のように交通手段や交通網が発達していたわけではなかったので、短くても数か月、長くなると半年も同じ地に滞在したそうで、「仕事」以外は自由にさせてもらっていたようで、そうなると幼い子ですから、宿の周辺で暮らす同年齢の子どもたちと仲良くなって遊ぶのですね。そういうことを8年くらい繰り返していたので、自然と8か国語を覚え、自由自在に操れるようになったのです。

実際にヴォルフガングのI.Q.が推測されているのですが、180だったというのが、おおよその研究結果だそうです。

因みに、日本人の平均I.Q.は100から120だそうで、東大生で126、140以上が天才と称されるレベルなのだそうです。

さて、行くところ行くところで、天才天才とチャホヤされたヴォルフガング坊や。当の本人にもともと天才という自覚はなかったとはいえ、そのうちに自負心も芽生えたでしょうから、これに対してうぬぼれぬように父親は厳しくいさめたそうですが、人格が破綻する要因もまた生まれたことはいなめないでしょう。

おまけに、王家同士のおつき合いの間は大抵は夜会ですから、噂が噂を呼んで行く先々で引っ張りだこになっていたモーツァルト父子もまた夜に引っ張り出されます。この体験の連続が成人してからのヴォルフガングの自堕落な生活につながったとしても無理のない環境だったことも推測されます。

そして月日が流れ、ヴォルフガング坊やも成人すると、「オレってテンサ〜イ！」というわけにもいなくなっていました。

「二十歳を過ぎればただの人」ではないですが、かつては可愛らしくて愛するしかた坊やも、二十歳になればヒネて憎たらしくなりますし、おまけに、幼き頃にチャホヤしてくれた王侯貴族のみなさんが、成人した彼を大手を広げて迎えてくれるだろうという予測自体が甘いわけです。

3歳とか5歳の可愛い坊やが大人顔負けのことをして見せたから王侯貴族の関心を思いのままに出来ただけであって、成人した「坊や」なんて、関心も何もなくなっているどころか、真の意味でヴォルフガングの天才性に気づいていた連中は皆無に等しかったのです。

当時の音楽家や画家は、いわゆる職人のひとりに過ぎませんでした。王侯貴族の芸術に対する理解レベルや関心度なんて所詮はこんなものです。

というのは、いかにに天才的な芸術家を抱えていて彼らによい仕事をさせるかが一種のステイタスだったわけで、王家同士とか国同士のおつき合いの中で、社交界やパーティが開かれる際に

は誇示するネタにされて、それにふさわしい作品を相手に示すことでお抱え主のお株を挙げる存在でしかありませんでした。いわゆる、「音楽家=職人」という時代ですね。



アントニオ・サリエリの肖像画



ヴォルフガングの父、レオポルト・モーツァルト

ですから、かつての天才も、一旦宮廷に入ったら（就職したら）、大人しく首領からの命令に従うのはもちろんの

こと、先輩の職人音楽家の命令にも従わねば、ヴォルフガングの場合であれば、宮廷楽長だったサリエリに睨まれないようにしないと、宮廷という組織の中で生きてはいけなかったでしょうし、社会的な地位も保てなかったことでしょう。

実は、父レオポルトは、この生き方を理想としている人でした。ところが、レオポルトを抱えていた首領は大司教（プロテスタントの高位にある人）で、しかし、音楽への理解力に乏しい人だったようで、レオポルトは薄給だったのです。それをどうにか打開したかったようで、ヴォルフガングを天才児として音楽教育をほどこし、あわよくば音楽に無理解の大司教の束縛から放たれて、もっと高位の王家のお抱え音楽家になるのを狙っていたそうです。

こういう背景があって、父レオポルトはわが息子を音楽的天才児としてプロデュースしたのですけれど、そのようなことをせずとも真の音楽の天才だったことには気づいていなかったようです。というのは、わが子の天才性に気づくには、親もまたそれに気づけるだけの才能が必要です。しかしながら処世術ばかりに着眼していたレオポルトには、自らの音楽的才能が息子のそれに至れるはずもなく、それゆえに息子の天才性にも気づけなかったのです。

そのうちに思春期を迎えたわが息子が、日増しに自分の言うことを聞かなくなってくるのです。

どの書物でも、父親の、とりわけ道徳的な教育の欠如が取り沙汰されていますが、ヴォルフガング自身が宮廷楽長のサリエリよりも自分の才能の高さとか、その時代の音楽性、たとえば作曲法とか和声的な感覚とかが自分の中で時代後れに感じ、自分の前衛的な発想を誰の制限も受けることなく自由に表現し、それを生活の糧にする、いわゆるフリーの音楽家として生きていきたかったのに、父親は、そんな不安定な生活ではなくて、有名王家のお抱えとして将来性がある安定した生活という将来設計をせよと諭す反面で、父親自身の出世という我欲に絡まれているということにも気づいていたのではないかというのがメイナード・ソロモンの主張です。

さて、これに対するサリエリですが、「ああ、あの小童（こわっば）か。ナンかやけに騒いでいるけれど、青い青い。ふふふ…。」

くらいな感覚で彼を見ているに過ぎなかった、あるいは、そういう接点さえなかったかも知れないというのが真実のようです。

ところが、飛躍的に研究が進んだ今なお、モーツァルトの最期には不吉な噂が付きまとっています。

この噂を後世にまで残すきっかけを作った「主犯格」は、帝政ロシア時代の最大の詩人のひとりだった、アレクサンドル・プーシキンです。



アレクサンドル・プーシキン

代表作に『オネーギン』・『スペードの女王』があり、どちらもチャイコフスキーがオペラの題材として取り上げています。

この大詩人が戯曲を書いてヨーロッパ中で大ヒットさせたのが、悪名高き書物となった『モーツァルトの毒殺』。

延々と、「ヴォルフガング坊」やとサリエリのやり取りが続く、ヨーロッパ

ではとりわけ有名な作品です（邦訳されているものに、ちらっと目を通したことがあります）。

『アマデウス』は、どうもこの作品を元に映画が作成されたようです。本編はサリエリの告白が進められていくのですが、自虐的な告白とはいえ、サリエリの立場や人生は、大阪弁で表現するなら「ホンマ、ボロクソやな」という感じです。

さて、帝政ロシア時代の最大の詩人のひとりによって出版された『モーツァルトの毒殺』は、瞬く間にヨーロッパ中で読まれたのですが、とにかく、モーツァルトの死因が確定されていないのは確かなのです。

作曲代をもらったら、宵越しの金は持たぬとばかりに毎夜を通して遊び倒すお金として消え、昼間でもワインを浴びるほど飲んで、しかもそのワインを飲む器には、ワインの味を甘くするという効果を狙って、鉛が塗られていたといのですから驚きです。

連日連夜、夜通しで浴びるほど酒を食らい、帰宅したらしたで昼下がりで寝て、起きて作曲をする。その際もワインを手放さなかったそうです。ですから、アル中の上に鉛と水銀の中毒だったと推測されます。

実はベートーヴェンも無類のワイン好きで、やはり真鍮製のコップで飲んでいたそうで、少量ずつワインに溶け出す鉛と水銀で肝臓が蝕まれていたと言われています。

それにしても、こんな夜通しで遊び倒して健康を保てるはずがありません。それにあろうことか、滋養強壯にと水銀を医者から微量とはいえ、投与されていたのです。

ことに18世紀から19世紀にかけての医学は、現代から見るとめちゃくちゃで、もうあり得ないことだらけですが、当時はこれが常識だったのいうのですから恐ろしい話です。

それで、この毎夜の徹夜と午前様にはさすがの奥様（コンスタンツェ）にも愛想を尽かされて、彼の最期の日も、燃料の薪を買うお金もなかったくらい寂しかったそうです。

そして、いよいよ葬儀です。

「天才、モーツァルト死す」  
「天才モーツァルト急逝」  
「巨星モーツァルト墜つ」



ヴォルフガングの妻  
コンスタンツェ・ヴェーバー

現在であれば、こういう文言で新聞の第一面が大きく飾られることでしょう。出版社によっては号外を出すかも知れません。

ところが、狭苦しい宮廷を飛び出して世間受けする曲を作ってはもてやされていたのに、彼が年齢を重ねるたびに彼の作品が難解になっていったことで、世間の評判はがた落ちになっていて、当時の新聞にちょこっと載ったくらい扱いだったそうです。

お金がありませんから、共同墓地にその他大勢で埋葬されてしまいました。なので、モーツァルトの墓はありますが、その下には遺骨のかけらもありませんし、今となっては、遺体がどこに埋葬されたのかも分かりません。

これなら何も怖くはないのですが、ここからがおかしいのです。辻褄が合わないことが多くて怖いというよりもミステリアスになっていきます。

当時、共同墓地に埋められるにしても、墓掘り人が遺体を請け負って責任をもって埋葬しますが、その際、遺族がいれば、せめて墓地の入り口までは同行するのがならわしでした。

ところが当日は大嵐になり、遺族は誰ひとりとして同行しなかった、という記録が残されています。ところが、当時から残されている天候の記録を調べた人によると、モーツァルトが埋葬された日は快晴となっているのです。

確かに誰ひとりとして同行しなかったのは事実ですが、天候が真逆なのはどうしてかという謎が残ります。もし、当日は晴天だったのに、その事実を曲げて大嵐の日捏造されたとしたら、それを誰が何の目的でおこなったのかということが問題になってきます。

一説によると、世間にはもう忘れかけられていたヴォルフガングの名前を再び浮上させるために仕組まれたことらしい、というのです。

そこにもってきて、彼の死の数か月前に起きたこともミステリーに拍車を掛けます。

有名な話として、夜な夜な死神の仮面をかぶった黒装束の男が「ある方の依頼で」と、彼の最後の作品で結局は絶筆になる『レクイエム（鎮魂歌）』作曲のオファーを持ち込んだというものがあります。

そのあまりの不気味さから、モーツァルト自身が死の妄想にとらわれたこともあり、他に依頼された仕事を放り出してでも、ずっと『レクイエム』の作曲に打ち込んでいたといわれています。



『AMADEUS』のワンシーン

でも、これも、「なんちゃって情報」なんですね。現代では依頼主も分かっています。

有名な作曲家に作曲依頼して作品を買い取っては、自分が作曲したと自慢して演奏することが趣味だった（実に悪趣味!）、フランツ・フォン・ワルゼック伯爵という男がいたのですが、この『レクイエム』の依頼者も彼で、あとでちゃんと自分の作品にしてしまい、それがばれるのを避ける目的で伯爵の召使いに死に神を連想させるような黒い仮面をかぶせ、全身黒尽くめの恰好をさせて夜な夜なモーツァルトの自宅を訪ねさせ、進捗状況を調べさせていたという、実に粗末なお話です。

それで、この伯爵なのですが、妻の一周忌にあたり、使用人たちに「自作のレクイエム」を演奏させようと考えて、こんな茶番劇をこさえたというわけです。

当時は落ちぶれていたとはいえ、天才の曲です。ご察しのとおり、すぐにバレてしまい、大恥をさらしたといえますから、自業自得でしょう。

ところが、この『レクイエム』に関しては、作曲者の本人が異様な執着を示していて、この曲は自分のために書いているという強い意識があったそうです。

快晴だった当日の天気を嵐にした張本人は、モーツァルトの奥様であるコンスタンツェ・ヴェーバーだったのではないかとされています。でも、確証が得られないのです。

彼女は彼の死後から数年を経て資産家と再婚したのでけれど、それは、再婚者の資産を使ってモーツァルトの名前を残すことに尽力するためだったのではないかという説が、かなり確実な事実として浮上してきています。

つまり、元夫の死後も未来永劫に彼の作品と名前を残すためには、「もう一度有名になってもらわないといけなかった」からだという理由づけが実証できれば、ヴォルフガングの死にまつわる謎はほぼ解決します。

しかし、これも一説に過ぎません、この情報操作したのは誰なのかは、闇に埋もれたままというわけです。

最後に 絶筆となった『レクイエム』ですが、彼の死後、弟子だったフランツ・クサーヴァー・ジュスマイヤーによって完成されています。

この大曲の前半部分でヴォルフガングの手によって書かれたものが、最初の2、3曲だけが完全な形で残されているだけで、あとはスケッチしか残さ

れていません。それを生前のヴォルフガングを知るジュスマイヤーが主軸になって推測に推測を重ね、苦心惨憺の末に完成させたものです。



フランツ・クサーヴァー・ジュスマイヤー

ですから、特に後半部分からは大きな段差のようなものが感じられますし、作品の最終曲にしても、ヴォルフガングが辛うじて残してくれた自筆譜の焼き直しの部分があったりして、果たしてヴォルフガング・モーツァルトの作品として良いものかどうかという議論は未だにされ続けています。

とはいうものの、モーツァルトの作品中で最も人気のある作品であることは言うまでもありません。

この作品は紛れもなくヴォルフガングが残した至高の作品です。それは、第1曲目の後半部分に当たるフーガは完全体であるし、どの曲を調べてみても、本当に音が少ないのです。これほどの少ない音で至高の響きを脳裏で紡ぎ出

し、脳裏で作り出したものを瞬間瞬間に楽譜に書き留めただけで全く書き直しをしなかったのですから、どれほどの才能の持ち主だったかは、筆舌に尽くしがたいというのが真実でしょう。

彼のミドルネーム（洗礼名）は「アマデウス」ですが、これは「神に愛される子ども」という意味がこめられているそうです。その名の通り音楽の神に愛され、愛されすぎたゆえに数奇な運命をたどり、通常の人ができる仕事量を、通常の人半分の時間でも、人類の宝ともいうべき珠玉の作品を残してくれたのは紛れもない事実なのです。



写真中央がモーツァルトの墓。写真奥の左にあるのがベートーヴェンの墓で、この写真の範囲外ではあるが、右の方にシュューベルトの眠る墓がある。

## 編集後記

今回は張り切りすぎて、編集後記が書けませんでした。（大汗）もともと音楽畑にいたのですが、なるべく専門的な言葉は使わないように心がけたつもりです。いかがでしたでしょうか。楽しんでいただけたらウレシイです。